

41866

教科書文庫

4
815
41-1935
20000 41358

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

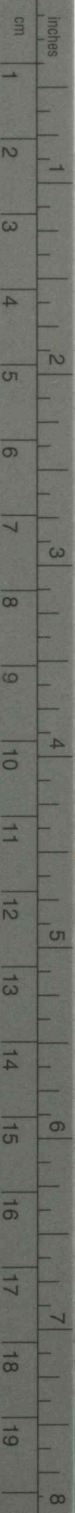


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



31759
Y019
資料室

三訂 新制 中學 文典

初學 專用

文學博士吉澤義則著

教科
41
200



濟定檢省部文

用科文漢語國校學中 日一十二月二十年十和昭

教科書文庫
4
815
41-1935
2000041358

資料室

375.9
Y019



訂三



新
制
中
學
文
典



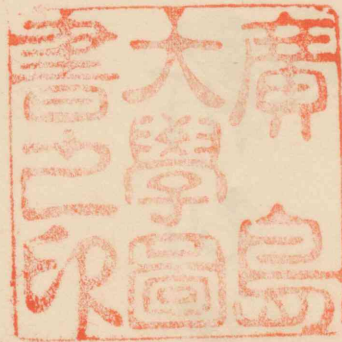
初學專用

修文館發行

広島大学図書

2000041358





例言

一本書は新教授要目に準據して中學校第一學年に於ける國文法教科書に充てんがために編纂せるものなり。

一本書は煩瑣なる理論を避け、極めて平易簡明なる説明を與へて、口語・文語の異同を知らしめ、用言の活用に練熟せしむることに力を用ひたり。

一例題并に練習問題は成るべく小學校國定教科書中よりこれを探り、以て小學校との聯絡をはかり、かねて生徒の興味を喚起することに力めたり。

昭和六年二月

著者識す

修正に當りて

一前版教科書の練習問題は中學校第一學年の生徒にとりては、その程度や、高きかの嫌ありしを以て、本修正版に於ては特にこの點に意を注ぎ、最も妥當にして而も興味多きものを載せたり。

一動詞の説明は活用形を前に活用の種類を後にせり。

昭和七年八月

著者識す

三訂に當りて

一第一學年の初に於ては品詞の區別を知ること困難なるを思ひ、單語篇(上)に於ては、品詞と品詞との間を區分することとせり。

一動詞と助動詞との接續法は第一學年の生徒にとりては稍解し難かるべきを思ひ、これを削除して上級用教科書に於て説くこととせり。

昭和十年八月

著者識す

卷之八

目次

第一章 單語・文 一
第二章 名詞 二
第三章 數詞 三
第四章 代名詞 五
第五章 動詞 八
第六章 形容詞 一〇
第七章 副詞 一三
第八章 接續詞 一四
第九章 感動詞 一六

單語篇(上) 目次

Table with 2 columns: Chapter/Section and Page Number. Chapters include 第一章 單語・文, 第二章 名詞, 第三章 數詞, 第四章 代名詞, 第五章 動詞, 第六章 形容詞, 第七章 副詞, 第八章 接續詞, 第九章 感動詞.

目次

第十章 助動詞 六

第十一章 助詞 三

單語篇 (下)

第一章 文語動詞 三

一 文語動詞の活用形 三

二 文語動詞の活用の種類 四

(イ) 正格活用 四

一 四段活用 四

二 上二段活用 六

三 上一段活用 四

四 下二段活用 六

五 下一段活用 三

(ロ) 變格活用 三

一 カ行變格活用 三

二 サ行變格活用 三

三 ナ行變格活用 三

四 ラ行變格活用 三

三 動詞活用の識別法 三

第二章 口語動詞の活用 四

第三章 形容詞の活用 四

第四章 音便 三

第五章 文語助動詞の種類及び活用 五

一 受身の助動詞 五

二 可能の助動詞 五

三 使役の助動詞 六

四 崇敬の助動詞 六

第六章 口語助動詞の種類及び活用

- 一 受身の助動詞 七
- 二 可能の助動詞 七
- 三 使役の助動詞 七
- 四 崇敬の助動詞 七
- 五 時の助動詞 七
- 六 推量の助動詞 八
- 七 打消の助動詞 八
- 八 指定の助動詞 八
- 九 咏嘆の助動詞 九
- 一〇 比況の助動詞 九
- 二 希望助動詞 九

- 六 推量の助動詞 六
- 七 打消の助動詞 七
- 八 指定の助動詞 七
- 九 比況の助動詞 七
- 一〇 希望の助動詞 七

第七章 助詞の用法

- 一 ぞ・なむ・こそ 六
- 二 や・か 九
- 三 ば・とも・ど・ども 八
- 四 と 八
- 五 だに・すら・さへ 八
- 六 な・な 八
- 七 ばや・なむ 八

八に・へ・・・・・・・・・・・・・・・・・・五

九がにを・・・・・・・・・・・・・・・・・・六

一〇てで・・・・・・・・・・・・・・・・・・七

第八章 接頭語・接尾語・・・・・・・・・・八

附録 文法上許容ニ關スル事項
表

- 第一表 文語動詞活用表
口語動詞活用表
- 第二表 文語形容詞活用表
口語形容詞活用表
- 第三表 文語助動詞活用表
- 第四表 口語助動詞活用表

目次終



訂三 新制中學文典 初學年用

文學博士 吉澤義則 著

單語篇 (上)

第一章 單語・文

- 一 花 咲く。
- 二 犬 が 走る。

右の例で傍線の施してある一つ／＼の語は、皆それ／＼或意味を表はしてゐる。かやうに或意味を表はす一つ／＼の語を單語といふ。しかして右の例のやうに、いくつかの單語が集まつ

單語

女

品詞

て纏まつた考を表はしてゐるものを文といふ。單語をその意味や働きや形の上から之を左の十種に分ける。しかしてその各を品詞といふ。

名詞 數詞 代名詞 動詞 形容詞 副詞 接續詞

感動詞 助動詞 助詞

第二章 名詞

一 東京は日本の首府なり。

二 野邊の若草に春の日は照つてゐる。

右の例で傍線の施してある語は、いづれも事物の名を表はしてゐる。かゝる語を名詞といふ。

練習

名詞
由ニト同じ
練習一

一 次の文中から名詞を抜出せ。

(イ) 春は若草山の芝、緑にもえたち、三月堂・二月堂霞につま
れてさながら夢の如し。

(ロ) 調子のよい蜜柑探歌がすみきつた晩秋の空氣をふるはし
て、のどかに聞えて来る。

(ハ) 一切經は佛教に關する書籍を集めた叢書である。

(ニ) 黄金の鎌のやうな弦月が高く鋭く光を放つてゐる。

(ホ) 楠正成は南朝の忠臣である。

二 名詞の定義をあげよ。

第三章 數詞

一 我が校は去る四月十日に開校第二十周年の

數詞
四二同じ

練習二

記念式を舉行せり。

一 一寸の蟲にも五分の魂。

三 鉛筆一ダースの價は五拾錢です。

四 第一號から第百號まで合格です。

右の例で、一寸五分一ダース五拾錢は事物の數量を表はし、四月十日第二十周年第一號第百號は事物の順序を表はしてゐる。かやうに事物の數量又は順序を表はす語を數詞といふ。

練習

- 一 次の文中から數詞を拔出せ。
- (イ) 五丈三尺の大佛、一千二百年の面影を殘せり。
- (ロ) 三番目の弟は八歳で、四番目のは五歳です。
- (ハ) ふもとの川を白帆が二つ三つ通つて行く。

- (ニ) 十で神童、十五で才子、二十過ぎてはたゞの人。
- (ホ) 左から二番目が第一學年の教室です。
- (ヘ) 僕は受験生三百人の中、十五番で入學しました。
- (ト) 二十五の五分の二は十である。
- 二 數詞を説明せよ。

第四章 代名詞

- 一 予は昨日かれを學校に訪ひぬ。
- 二 こはわれの知るところにあらざ。
- 三 汝は誰ぞ、そを何處にか負ひて行く。
- 四 私はこれでもどれでも結構です。
- 五 あのかたはどちらに行きましたか。

代名詞

人代名詞

指示代名詞

右の例で、傍線の施してある語は、皆名詞の代りに用ひられてゐる。かゝる語を代名詞といふ。
又、右の例の中で、予かれわれ汝誰私あのかたは人の名の代りに用ひられてゐるものでこれを人代名詞といひ、こそ何處これどれどちらは事物場所方向を示してゐるものでこれを指示代名詞といふ。

人代名詞の例

われ 私 僕 小生 わらは
なれ 汝 君 貴君 あなた おまへ
かれ あれ あの方

指示代名詞の例

誰 なにがし だれ どなた どの方
この これ そ その それ
かの あの あれ どれ どの いづれ

體言

練習三

名詞・數詞・代名詞を體言といふ。

練習

一 次の文中から代名詞を抜出して、その種類を答へよ。

- (イ) 農夫はあの山のこなたを通つて、あの川のあちらに行つた。
- (ロ) あれは僕の作つた曲だ。
- (ハ) 君はそれとこれとどつちが好きか。どれでも君の好む方を上げよう。

- (一) おまへが今學問をやめるのは、私がこの機を切つてしまふのと同じだ。
 - (ホ) 蜻蛉釣今日はどこまで行つたやら。
 - (ヘ) あちらでもこちらでも、さえた鉄の音がちよきん／＼と聞える。
 - (ト) そこを東に折れ、あすこを北に曲れば大通りです。
- 二 代名詞の定義をのべよ。

第五章 動詞

- 一 蝶は舞ひ、鳥は歌ふ。
- 二 庭に梅の木あり。
- 三 朝早く起きる。

動詞

練習四

四 こゝに鳩が居る。

右の例で、舞ひ、歌ふ、起きるは事物の動作をあり、居るは存在を表はしてゐる。かやうに事物の動作存在を表す語を動詞といふ。

練習

一 次の文中から動詞を抜き出せ。

- (イ) 風が吹く、花が散る、蝶々のやうに花が舞ふ。
- (ロ) 蠶は絲を吐き、蜂は蜜を作る。
- (ハ) 秋は春日の社、神さび、手向山の紅葉、夕日にはゆる様、殊に見所あり。
- (ニ) さや／＼揺れる葉蔭では、露の散るのがうれしいか、ころころ／＼と蟲が啼く。
- (ホ) 病は口より入り、禍は口より出づ。

- (へ) 刈る、切る、掘る、運ぶ、誰も彼も一心不乱に働く。
- 二 動詞を説明せよ。

第六章 形容詞

- 一 松 青く、砂 白し。
- 二 終夜 烈しき 風 吹く。
- 三 良い 薬 は 苦い。
- 四 夏 は 暑く、冬 は 寒い。

右の例で、傍線の施してある語は、事物の性質、若くはありさまを表はしてある。かやうに事物の性質、若くはありさまを表はす語で、言ひ切る時の形の終が、文語ならばし、口語ならばいとなるものを形容詞といふ。

形容詞

のうらなひ

用言

練習五

動詞形容詞を用言といふ。

練習

一 次の文中から形容詞を抜き出せ。

- (イ) 夏の短い北海道では秋の來るのが早い。
- (ロ) 光の強い部分もあれば弱い部分もある。
- (ハ) 暗い寒い冬から明るい暖い春に移ります。
- (ニ) 低き家、狭き町、淋しき松、丈高き稻の穂、鼻の先に並びたる連山、をさなき頃より見なれたる一軒家、皆莞爾として我を迎ふるに似たり。
- (ホ) 三度たく飯さへこはしやはらかし心のまゝにならぬ世の中。
- (へ) 死は鴻毛より軽く、義は泰山より重し。

二 形容詞の定義をのべよ。

第七章 副詞

一 潮次第に満ち、水さかさまに流る。

岸の柳の葉は枯れて、ほろくくとこぼれる。

二 この花頗る美し。

この川の流は非常にものすごい。

右の例で、(一)の次第には動詞満ち、さかさまには動詞流る、ほろほろとは動詞こぼれるの意義を限定し、(二)の頗るは形容詞美し、非常には形容詞ものすごいの意義を限定してゐる。かやうに動詞や形容詞の意義を限定する語を副詞といふ。
三 彼はいと速かに走りき。

副詞

もう少し 靜かに 讀みなさい。

右の例で、いとは副詞速かにの、もう少しは副詞靜かにの意義を限定してゐる。かやうに副詞は又他の副詞に添うてその意義を限定することがある。

故に副詞は動詞形容詞又は他の副詞に添うてその意義を限定する語である。

練習六

練習

一 左の文中の副詞を指摘し、且つその副詞がいつれの語の意味を限定してゐるかを説明せよ。

(イ) 雨はらくと降りそぐ。

(ロ) いやく降りしきる雨に、水はますます増加せり。

(ハ) 彼は最もまじめに仕事を勵む。

- (ニ) さえたはさみの音がちよきんくと聞えて来る。
- (ホ) 今朝は雲霧なごりなく晴れて、海山はるくと見渡さる。
- (ヘ) 汽車はいと静かに動き始めぬ。

二 次の副詞を用ひて短文を作れ。

やがて。 やゝ。 もつと。
 あたかも。 だんく。 暫く。

三 副詞を説明せよ。

第八章 接 續 詞

- 一 國語 英語 及び、數學の三科を學ぶ。
- 二 文を學び、且つ武を習ふ。
- 三 春は來りぬ。されど鶯は未だ鳴かず。

接續詞

練習七

右の例で、及び、且つ、されどは上下の語句、文章を接續するため
 用ひられてゐる。かゝる語を接續詞といふ。

練習

一 次の文中から接續詞を抜き出せ。

- (イ) 諸車の通行を禁ず。但し郵便車はこの限りにあらず。
 - (ロ) 霞か雲か、はた雪か。
 - (ハ) 飲食を節せよ。然らざれば健康に害あり。
 - (ニ) 今日、風は吹くだらう。しかし雨は降るまい。
 - (ホ) 明朝、或は明晩はお尋ねいたさうと思つてゐます。もつとも雨天でしたら失禮いたすかも知れません。
- 二 次の——ところに適當な接續詞を入れよ。
- (イ) 私は随分盡力した。結果は不成功であつた。

君は餘より力か
 強し

- (ロ) 秋は来りぬ、しかし暑氣未だ退かず。
- (ハ) 彼は學力が優秀で、又品行が方正です。それを惜しいことに身體が健康でありませぬ。
- 三 次の接續詞を用ひて短文を作れ。
 それに。 それとも。 さうして。
 けれども。 しかも。
- 四 接續詞を説明せよ。

第九章 感動詞

- 一 あゝ、哀しいかな。
- 二 いざや、歌はん諸共に。
- 三 さてく、残念なことをしました。

感動詞

練習八

四 おや、大變です。ね。
 右の例で、傍線を施した語は、いづれも感動した時に發する語である。かゝる語を感動詞といふ。

○「あゝかなしいかな。」三笠の山に出でし月かも。」のかなかものやうに文の終りに來るものは感動の意をあらはす助詞である。

練習

一 次の文中から感動詞を抜き出せ。

- (イ) 松島や あゝ松島や松島や。
- (ロ) あはれ人の世のはかなさよ。
- (ハ) すは敵よせ來れり。
- (ニ) あら風が吹いて來た。
- (ホ) おやく、まあ可愛らしい。

(へ) え、口惜しい。

(ト) いざ、起出でて勇ましく、我もはげまん今日の業。

第十章 助動詞

一 明日は雨降らむ。

二 よく勉強又よく遊ぶべし。

三 生徒、先生に褒めらる。

四 僕は昨日朝早く旅行に出かけて往つた。

右の例で、むべし、らる、及びたは何れも動詞に添うて其の意義を助ける。かゝる語を助動詞といふ。

助動詞

練習九

練習

一次の文中から助動詞を摘出せよ。

(イ) 山門 高き松風に昔の音やこもるらむ。

(ロ) 夜の更けぬ間にこの書を読み終へむ。

(ハ) 人に車を押させる。

(ニ) 雨は降るだらう、しかし風は吹くまい。

(ホ) 母校の運動會に誘はれた。

(へ) 靴の音が聞える、弟が歸つたらしい。

二 次の文を口語文になほせ。

(イ) 明日雨降らむ。

(ロ) 文字を習はしむ。

(ハ) 犬人に蹴らる。

(ニ) 父は謡曲を好まる。

(ホ) 命も危かるべし。

第十一章 助詞

- 一 兄は畫を畫く。
- 二 鳥が鳴く。
- 三 犬すら恩を知る。
- 四 東京から歸る。
- 五 鉛筆で書く。

右の例のはをがすらをからでは種々の語について、その語に意義を添へ、又は他の語との關係をあらはしてゐる。かゝる語を助詞といふ。助詞は又テニヲハともいふ。

練習

- 一 次の文中の助詞を指摘せよ。

助詞
(テニヲハ)

練習一〇

十品詞

- (イ) 學も徳も高し。
 - (ロ) 雨降り風さへ吹く。
 - (ハ) 花ありやなしや。
 - (ニ) 千丈の堤も蟻の穴から崩れる。
 - (ホ) 勉強さへすればどんなことでも出来る。
 - (ヘ) 君は神戸から倫敦へ行く航路を知つてゐるか。
- 以上説き來つた所によつて、單語に十種の別、即ち十品詞のあることが明かである。

文語動詞の活用形

單語篇(下)

第一章 文語動詞

一 文語動詞の活用形

よ讀		し死	
ま	み	な	に
むずば	つゞく	むずば	易し
(第一形)	(第二形)	(第一形)	(第二形)
む	む	ぬ	ぬ
(第三形)	(第三形)	ぬる時	(第三形)
む人	(第四形)	ぬれ	(第四形)
(第四形)	(第五形)	どば	(第五形)
め	め	ね	ね
どば	(第五形)	どば	(第六形)
(第六形)	(第六形)		

動詞は右の如く變化しない部分と、變化する部分とを有する。

語幹
(語根ともいふ)
語尾
活用

未然形

連用形

終止形

その變化しない部分を語幹といひ、變化する部分を語尾といひ、その變化することを活用といひ、その變化する各の語形を活用形といふ。動詞は必ず五十音圖の一行内で活用する。即ち讀むはマ行、死ぬはナ行に活用する類である。

第一形 この形は多く「ば」「む」「ず」などに連つて、動作のまだ成立しない意をあらはすに用ひる形であるから、これを未然形と名づける。

第二形 この形は多く用言に連ねる時に用ひる形であるから、これを連用形と名づける。

第三形 この形は多く文を終止するに用ひる形であるから、これを終止形と名づける。なほこの形が動詞の本體である。

連體形

已然形

命令形

文語動詞の活用の種類

正格活用
四段活用

第四形

この形は多く體言に連ねる時に用ひる形であるから、これを連體形と名づける。

第五形

この形は多く「ば」「ど」「ども」などに連つて、動作の已に成立した意をあらはすに用ひる形であるから、これを已然形と名づける。

第六形

この形は命令の意をあらはすに用ひる形であるから、これを命令形と名づける。

二 文語動詞の活用の種類

動詞の活用の形式は一様でない。これを正格活用(五種)と變格活用(四種)に分ける。左にその各について説明する。

一 四段活用

(1) 正格活用

動詞の語尾が五十音圖のアイウエの四段に互つて變化するものを四段活用といふ。この活用に屬する動詞は左の六行に存して、動詞の中でその數が最も多い。

釣	飲	習	立	押	書	動詞
る	む	ふ	つ	す	く	語幹
釣 ^ツ	飲 ^ム	習 ^フ	立 ^ツ	押 ^ス	書 ^ク	未然
ら	ま	は	た	さ	か	連用
り	み	ひ	ち	し	き	終止
る	む	ふ	つ	す	く	連體
る	む	ふ	つ	す	く	已然
れ	め	へ	て	せ	け	命令
れ	め	へ	て	せ	け	尾

上二段活用

二 上二段活用

動詞の語尾が五十音圖のイウの二段に互つて變化し且つウ段に属する動詞は左の六行に存在してゐる。

老 ^ウ	恨 ^ウ	生 ^ウ	落 ^ウ	盡 ^ウ	動詞
老 ^ウ	恨 ^ウ	生 ^ウ	落 ^ウ	盡 ^ウ	語幹
い	み	ひ	ち	き	未然
い	み	ひ	ち	き	連用
ゆ	む	ふ	つ	く	終止
ゆる	むる	ふる	つる	くる	連體
ゆれ	むれ	ふれ	つれ	くれ	已然
い	み	ひ	ち	き	命令
よ	よ	よ	よ	よ	尾

上一段活用

三 上一段活用

動詞の語尾が五十音圖のイ段にのみ活用し且つこれに属する添うて活用するものを上一段活用といふ。この活用に属する動詞は左の六行に存在してゐる。

懲 ^イ	懲 ^イ	懲 ^イ	懲 ^イ	懲 ^イ	懲 ^イ
懲 ^イ	懲 ^イ	懲 ^イ	懲 ^イ	懲 ^イ	懲 ^イ
り	り	り	り	り	り
り	り	り	り	り	り
る	る	る	る	る	る
る	る	る	る	る	る
れ	れ	れ	れ	れ	れ
り	り	り	り	り	り
よ	よ	よ	よ	よ	よ

下二段活用

居	見	干
る	る	る
(居 ^キ)	(見 ^ミ)	(干 ^ヒ)
ゐ	み	ひ
ゐ	み	ひ
ゐる	みる	ひる
ゐる	みる	ひる
ゐれ	みれ	ひれ
ゐよ	みよ	ひよ

四 下二段活用

動詞の語尾が五十音圖のウエの二段に互つて變化し、且つウ段に属する動詞は五十音圖中の各行に互つて存在し、その數の多いことは四段活用の次に位してゐる。

得	動詞
(得 ^ウ)	語幹
え	未然
え	連用
う	終止
うる	連體
うれ	已然
えよ	名命

植	隠	燃	求	加	兼	建	任	受
う	る	ゆ	む	ふ	ぬ	つ	す	く
植 ^ウ	隠 ^カ	燃 ^ヒ	求 ^{モト}	加 ^ク	兼 ^カ	建 ^タ	任 ^{タカ}	受 ^ウ
ゑ	れ	え	め	へ	ね	て	せ	け
ゑ	れ	え	め	へ	ね	て	せ	け
う	る	ゆ	む	ふ	ぬ	つ	す	く
うる	る	ゆる	むる	ふる	ぬる	つる	する	くる
うれ	れ	れ	れ	れ	れ	れ	れ	れ
えよ	れよ	えよ	めよ	へよ	ねよ	てよ	せよ	けよ

下一段活用

五 下一段活用
動詞の語尾が五十音圖のエ段にのみ活用し、且つこれに「れ」の添うて活用するものを下一段活用といふ。この活用に屬する動詞は、カ行のみに存在し、而も「蹴る」の一語あるのみである。

蹴る	動詞	語幹	未然	連語	終止	連體	已然	尾	命令
(蹴)			け		ける	ける	けれ		けよ

變格活用

カ行變格活用

(口) 變格活用

一 カ行變格活用

動詞の語尾が五十音圖のイウエの三段に互つて活用し、且つウ段に「れ」の添うて活用するものをカ行變格活用といふ。この活用に屬する動詞は「來」の一語あるのみである。

來	動詞	語幹	未然	連語	終止	連體	已然	尾	命令
(來)			こ		くる	くる	くれ		こよ

サ行變格活用

二 サ行變格活用

動詞の語尾が五十音圖のイウエの三段に互つて活用し、且つウ段に「れ」の添うて活用するものをサ行變格活用といふ。この活用に屬する動詞は「爲」の一語あるのみである。

爲	動詞	語幹	未然	連語	終止	連體	已然	尾	命令
(爲)			せ		する	する	せよ		

但し「ず」は他の語と熟合してサ行變格活用の動詞を作る。

罪す 旅す ものす 勉強す 辱くす

せ、し、す、お、ま、す、れ、せ、

い、う、え、

ナ行變格活用

審にす 講ず 論ず 等。

三 ナ行變格活用

動詞の語尾が五十音圖のアイウエの四段に互つて活用し、且つウ段に^レの添うて活用するものをナ行變格活用といふ。この活用に屬する動詞には「死ぬ」「往ぬ」の二語あるのみである。

往死	動詞	語幹	未然	連用	終止	連體	已然	命令
ぬぬ			な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね

ラ行變格活用

四 ラ行變格活用

動詞の語尾が五十音圖のアイウエの四段に互つて活用し、イ段で言ひ切るものをラ行變格活用といふ。この活用に屬する動詞は「有り」「居り」「侍り」の三語あるだけである。

侍	居	有	動詞	語幹	未然	連用	終止	連體	已然	命令
り	り	り			侍 ^レ 居 ^レ 有 ^レ	ら	り	り	る	れ

形容動詞

猶、高かり。美しかり。のやうに、形容詞高く、美しくにこの動詞あり。のつゞいて約められたものや、明瞭なり。平然たりのやうに副詞明瞭に平然とに同じく動詞ありのつゞいて約められたものも亦ラ行變格活用である。これらを一括して形容動詞とも呼ん

高	語幹	未然	連用	終止	連體	已然	命令
か		ら	り	り	る	れ	れ

有り、死ぬ、なす、ぬ、ぬる、ぬれ、ね

口語では左表のやうに活用する。

語幹	未然	連用	終止	連體	已然	命令
美し	から	かつ	○	○	○	○
明瞭	だら	だつ	だ	な	なら	

以上述べた動詞活用の種類を表示すれば左の通りである。

動詞活用

- 正格活用
 - 上二段活用
 - 上一段活用
 - 下二段活用
 - 下一段活用
- 變格活用
 - カ行變格活用
 - サ行變格活用
 - ナ行變格活用
 - ラ行變格活用

四段活用

- 上二段活用
- 上一段活用
- 下二段活用
- 下一段活用

變格活用

カ行變格活用
サ行變格活用
ナ行變格活用
ラ行變格活用

あにぬ
あす
さし
いあし
あね
せし
りりり
れれれ



三 文語動詞の識別法

(イ) 活用の種類を識別する法

以上述べた正格變格九種の活用中、左の六種に屬する動詞は、その数が極めて少いから、悉くこれを語記せねばならぬ。

上一段活用 射る 鑄る 著る 煮る 似る 干る 見る

(顧みる・鑑みる・
惟みる・試みる) 居る 率ゐる

上一段活用 蹴る

カ行變格活用 來

サ行變格活用 爲 (この外、信ず、
勉強すの類)

ナ行變格活用 死ぬ 往ぬ

ラ行變格活用 有り 居り 侍り

○四段上二段下二段の三活用に屬する動詞は、その数が甚だ多

いけれども、左の識別法によつてこれを知ることが出来る。

一 「讀まず」「書かず」の如く打消のずがア段の音につゞくものは四段活用である。

二 「落ちず」「悔いず」の如く打消のずがイ段の音につゞくものは上二段活用である。

三 「榮えず」「兼ねず」の如く打消のずがエ段の音につゞくものは下二段活用である。

(ロ) 活用の假名遣を識別する法

一 ア行・ハ行・ヤ行・ワ行の識別法

ア行 得

下二段

ワ行 植う 飢う 据う

下二段

居る 率ある

上一段

ヤ行 終止形がゆとなるもの 聳ゆ。絶ゆ。の類。

右の外はすべてハ行である。

二 ザ行・ダ行の識別法

ザ行 混ず

下二段

サ變動詞中の講ず・論ず・輕んず等のやうに語尾の濁るもの。右の外はすべてダ行活用である。

練習二

練習

一 次の文中、傍線を施した動詞の活用の種類と活用形の名とを示せ。

(イ) 大空に聳えて見ゆる高嶺にも登れば登る道はありけり。

(ロ) 不自由を常と思へば不足なし。心に望おこらば困窮したる時を思ひ出すべし。

(ハ) 常に良き著述に親しむ者は只獨り居れども寂しきことを覺えず。

(ニ) 浪にたゞよふ氷山も來らば來れ恐れんや海まきあぐるたつまきも起らば起れ驚かじ。

(ホ) 朱硯に葡萄のからの散亂す。ナ行 變

(ヘ) 子のためよかれと思ふは親の情なり。

二 左の動詞を活用によつて類別し、その六つの活用形を表で示せ。

射る。老ゆ。居り。死ぬ。死す。据う。

往ぬ。悔ゆ。煮る。用ふ。朽つ。信ず。

聳ゆ。怖づ。消ゆ。論ず。攀づ。教ふ。

三 左の文中の動詞の活用に誤があればなほせ。

(イ) 汝に出ずるものは汝にかへる。

(ロ) 鷹は飢餓とも穂はつまず。

(ヘ) 君に事え親に仕う

(ハ) 困難に堪えうる人は年老みて憂なからむ。

(ホ) 恥せてよく改め、覺へて忘れず。

(イ) 汝我が言を用いずば老いて後に悔ふることあらん。

四 次の文中の動詞に活用形の誤つてゐるものがあれば正せ。

(イ) 教ふは學ぶの半ばなり。

(ロ) 人はパンのみにて生くものにあらず。

(ハ) 日の暮るを待ちて檐の岐阜提灯に火を點す。

(ニ) 與ふは受くよりも幸なり。

(ホ) 崩る崖倒る家逃げ惑ふ人々の泣き叫ぶ聲友はそも如何にかせし。

口語動詞の活用

四段活用

第二章 口語動詞の活用

一 四段活用

口	文	活用 語幹 語尾	未然	連用	終止	連體	已然(文) 假定(口)	命令
四段	讀	讀	ま	み	む	む	め	め
			死なう。	死にます。	居らう。	居ります。	(未然形)	
			死ね。	死ねば。	居れ。	居れば。	(終止形)	(命令形)
			死ぬ時。	居る時。	居る時。	居れば。	(連體形)	
			死め。	讀めば。	讀む時。	讀めば。	(連體形)	

上一段活用

have.
wash.
here is an English

二 上一段活用

著よう。	落ちよう。	(未然形)
著ます。	落ちます。	(連用形)
著る。	落ちる。	(終止形)
著る人。	落ちる人。	(連體形)

右の表の如く口語では文語のナ變ラ變共に四段活用となる。
◎文語動詞の已然形に當るところは、口語動詞ではすべて假定の條件を示す意味となるから、假定形と名づける。

口	文	口	文
四段	ラ變	四段	ナ變
居		死	
ら	ら	な	な
り	り	に	に
る。	り。	ぬ	ぬ
る	る	ぬ。	る。
れ	れ	ぬ。	れ。
れ	れ	ぬ	ぬ

著れば

落ちれば

(假定形)

著よ

落ちよ

(命令形)

(ろ)

(ろ)

文		口		活用 語幹 語尾
上二	上	上	上二	
著		(著)		未然
ち	き	ち	き	連用
ち	き	ち	き	終止
ち	き	ち	き	連體
ち	き	ち	き	已然(口文)
ち	き	ち	き	命令

右の表の如く、文語の上二段、上二段は口語では共に上一段活用

となる。

三 下一段活用

蹴よう

受けよう

(未然形)

下一段活用

蹴ます

受けます

(連用形)

蹴る

受ける

(終止形)

蹴る人

受ける人

(連體形)

蹴れば

受ければ

(假定形)

蹴よ

受けよ

(命令形)

(ろ)

(ろ)

文		口		活用 語幹 語尾
下二	下	下	下二	
蹴		(蹴)		未然
け	け	け	け	連用
け	け	け	け	終止
け	け	け	け	連體
け	け	け	け	已然(口文)
け	け	け	け	命令

右の表の如く、文語の下二段、下一段は口語では共に下一段活用

となる。

カ行變格活用

四 カ行變格活用

友は來ない。
 友が來た。
 友が來る。
 友の來る時。
 友が來れば
 友よ早く來い。

(未然形)
 (連用形)
 (終止形)
 (連體形)
 (假定形)
 (命令形)

口	文	活用
カ變	(來)	語幹/語尾
こ	こ	未然
き	き	連用
く る	く る	終止
く る	く る	連體
く れ	く れ	假定(口文)
こ い	こ よ	命令

右の表の如く、口語では終止形及び命令形に文語と異なる點がある。

サ行變格活用

五 サ行變格活用

運動をせぬ。
 運動をしない。
 運動をします。
 運動をする。
 運動をする時。
 運動をすれば。
 運動をせよ。
 運動をしよ。

(未然形)
 (連用形)
 (終止形)
 (連體形)
 (假定形)
 (命令形)

口	文	活用
サ變	(爲)	語幹/語尾
し せ	せ	未然
し	し	連用
す る	す る	終止
す る	す る	連體
す れ	す れ	假定(口文)
し よ	せ よ	命令

右の表の如く、口語では未然形・終止形及び命令形に文語と異なる点がある。

以上の如く口語動詞の活用は四段上一段下一段力變サ變の五種となる。今左に文語・口語兩活用の種類を比べよう。

文語 (九種)	四段活用	ナ行變格活用	ラ行變格活用	上一段活用	上二段活用	下一段活用	下二段活用	カ行變格活用	サ行變格活用
口語 (五種)	四段活用	上一段活用	下一段活用	カ行變格活用	サ行變格活用				

◎口語動詞の活用の識別法

○語數の少ないもの

カ行變格活用 來る

サ行變格活用 爲る (この外、勉強する論ずるの類)

○四段上一段下一段の三活用に屬する動詞は、その數が多いけれども、左の見分法によつてこれを知ることが出来る。

- 一 「讀まぬない」「死なぬない」のやうに打消のぬないがア段の音につゞくものは四段活用である。
- 一 「落ちぬない」「みぬない」のやうに打消のぬないがイ段の音につゞくものは上一段活用である。
- 一 「受けぬない」「飢ゑぬない」のやうに打消のぬないがエ段の音につゞくものは下一段活用である。

練習二

練習

- 一 次の文中の口語動詞の活用の種類と活用形とを答へよ。
- (イ) 最後に出る者が戸を締める。
 - (ロ) 猿も木から落ちることがある。
 - (ハ) 恥ぢることを知らない者は、自ら身を辱める者だ。
 - (ニ) 右を立てれば左が立たぬ、兩方立てれば身が立たぬ。
 - (ホ) 湯を浴びた猫は水を恐れる。
 - (ヘ) 猫が肥えれば鯨節が痩せる。
 - (ト) 打つも撫でるも親の恩。

二 次の口語動詞を活用させて六つの語形を作れ。

吠える。

朽ちる。

閉ぢる。

留める。

死ぬ。

文語形容詞の活用

第三章 形容詞の活用

一文語形容詞の活用

高 <small>タカシ</small>		美 <small>ウツクシ</small>	
く とば	く とば	し とば	し とば
く 聳ゆ	く 咲く	し 咲く	し 咲く
し	し けれ	し けれ	し けれ
き 山	し けれ	し けれ	し けれ
けれ	どば	どば	どば

形容詞も動詞のやうに、變化しない部分と、變化する部分とを有する。その變化しない部分を語幹といひ、變化する部分を語尾といひ、その變化することを活用といふ。しかしてその活用には二種類ある。即ち右の例の「高し」の如く語尾がくし「きけれ」と

語幹
(語根ともいふ)
語尾
活用

文語形容詞活用表

活用するものをク活用といひ「美し」の如く語尾がしくししきし
けれと活用するものをシク活用といふ。今これを表示すると
左の通りである。

文語形容詞活用表

活 用	語 尾		未 然 形	連 用 形	終 止 形	連 體 形	已 然 形
	幹	尾					
ク 活 用	美	清	ク	ク	シ	キ	ケレ
シク 活 用	美		シク	シク	シ	シキ	シケレ

連用形は左例の如く副詞に轉ずる語形であるから、又副詞形と
もいふ。

早く起き、遅く寝ぬ。

(注意) 形容詞には命令形がない。

口語形容詞の活用

二 口語形容詞の活用

口語形容詞の活用は一種類でク活用とシク活用との區別がな
い。
即ち左のやうに活用する。

語 尾	語 幹		未 然 形	連 用 形	終 止 形	連 體 形	假 定 形
	高	美					
〇	〇		〇	〇	い	い	けれ

(注意) 文語未然形「高くば」「美しくば」は口語では消滅し、已然形の「高け
れば」「美しければ」を用ひて假定の意味をあらはす。

練習 一三

一 左の文中から形容詞を抜出し、その活用形をいへ。

文語

- (イ) 景色よき地には歴史上のゆかしさなく、歴史上にゆかしき地には景色に風情なきもの世に多し。
- (ロ) 命長ければ恥多し。
- (ハ) 朝夕は浸ぎ易けれど、日中はたへがたし。
- (ニ) 遠き慮なければ必ず近き憂あり。
- (ホ) 雨も好し、露も好し、霞も曇も天より降るものの面白からぬは無きが中に雪は特にめでたし。

口語

- (イ) お世辭がよければ品物がわるい。
- (ロ) 美しい林檎も酸いことがある。
- (ハ) 石が大きければ水煙も夥しい。
- (ニ) 涼しい風に送られて琴の音がゆかしく聞える。
- (ホ) 色は美しいが味は辛くて、香もわるい。
- (ヘ) 身分は賤しいが行状は正しい。

次の形容詞を活用させよ。

- 貧し 鈍し 苦々し 勇まし 嬉しい 貴い 憎い

動詞の音便

動詞の音便

第四章 音便

動詞の連用形からてたりたに連なる時、その語尾が發音の便宜上他の音に轉ずることがある。これを動詞の音便といひ、その文字をも書き改めねばならぬ。動詞の音便に左の四種がある。

イ音便

一 イ音便 きぎのいに轉ずるもの。

- | | | | |
|------------------------|----------|------------------------|----------|
| 説 <small>き</small> いて | (文語)(口語) | 泳 <small>ぎ</small> いて | (文語)(口語) |
| 説 <small>き</small> いた | (口語) | 泳 <small>ぎ</small> いだ | (口語) |
| 説 <small>き</small> いたり | (口語) | 泳 <small>ぎ</small> いだり | (口語) |

○文語では「指して」が「指いて」となるやうに、稀に「し」が「い」に轉

ウ音便

ずることもある。

二 ウ音便 ひのうに轉ずるもの。

買う。て (文語) (口語)

買ひ。買う。た (口語)

買う。たり (口語)

撥音便

三 撥音便 にびみの撥音んに轉ずるもの。

死ん。て (文語) (口語)

死に。死ん。だ (口語)

死ん。だ (口語)

學ん。て (文語) (口語)

學び。學ん。だ (口語)

學ん。だ (口語)

飲ん。て (文語) (口語)

飲み。飲ん。だ (口語)

飲ん。だ (口語)

促音便

四 促音便 ちひりの促音つに轉ずるもの。

勝つ。て (文語) (口語)

勝ち。勝つ。た (口語)

勝つ。たり (口語)

買つ。て (文語) (口語)

買ひ。買つ。た (口語)

買つ。たり (口語)

釣つ。て (文語) (口語)

釣り。釣つ。た (口語)

釣つ。たり (口語)

形容詞の音便

形容詞の音便

イ音便

一 イ音便 きのいに轉ずるもの。

善き。哉 善い。哉 (文語)

ウ音便

二 ウ音便 くのうに轉ずるもの。

暑くなる 暑う。なる (文語)

深く御座います ———— 深う御座います (口語)
 ○又形容詞の連用形から轉じた副詞が、サ行變格の「す」と合して熟語の動詞となる時に、その語尾のくがウ音便を起すことがある。

ウ音便 全くす ———— 全うす (文語)

練習一四

練習

一 左の文中の動詞・形容詞の音便を指摘してその原音を
 示せ。

- (イ) 旅に病んで夢は枯野をかけ廻る。
- (ロ) 柿食うて洪水の詩を草しけり。
- (ハ) 何處かで逢うたことのあるやうな人だ。
- (ニ) 學問は重荷を負うて坂を攀づるが如し。

(ホ) その程々に従つて祈らぬ神佛もなし。

二 左の文の誤を正し、且つその理由を述べよ。

- (イ) 飛むで火に入る夏の蟲。
- (ロ) 養ふた上に敬ふことが大事だ。
- (ハ) 思ふて居るばかりでは埒があかぬ。言ふて見よ。
- (ニ) 苦しむことも恥づかしむこともすべて堪へ忍むで、仕事にあたらうと思ふ。
- (ホ) 首尾よふ卒業せられておめでたふございます。
- (ヘ) 負ふた子に髪なぶらるゝ暑さ哉。
- (ト) 轉むでも笑ふてばかり難かな。
- (テ) 任重ふして負荷に堪へず。

文語助動詞

受身

る

らる

第五章 文語助動詞の種類及び活用

一 受身の助動詞

一 犬、人に打たる。

二 犬、人に蹴らる。

右のるらるは或ものが他のものから動作を受ける意味をあらはすもので、これを受身の助動詞といふ。
受身の助動詞は次のやうに活用する。

助動詞	未然	連用	終止	連體	已然	命令
る	レ	レ	ル	ルル	ルレ	レヨ
らる	ラレ	ラレ	ラル	ラルル	ラルレ	ラレヨ

二 可能の助動詞

可能

る

らる

べし

べから

一 一日に十里の道を行かる。
 二 六尺の堀も飛び越えらる。
 三 腰間の秋水、鐵をも斷つべし。
 四 その勢あたるべからず。

右のるらるべしべからはその動作を成し得る意をあらはすもので、これを可能の助動詞といふ。
 可能の助動詞は次のやうに活用する。

助動詞	未然	連用	終止	連體	已然	命令
る	レ	レ	ル	ルル	ルレ	○
らる	ラレ	ラレ	ラル	ラルル	ラルレ	○
べし	ベク	ベク	ベシ	ベキ	ベケレ	○
べかり	ベカラ	ベカリ	(ベカリ)	(ベカル)	(ベカレ)	○

使役
す
さす
しむ

括弧内のものは現代文では殆ど用ひられない。

◎「べし」は又命令にも用ひられる。

明日八時出頭すべし。

三 使役の助動詞

- 一 生徒に字を書かす。
- 二 大工に家を建てさす。
- 三 下男に田を耕さしむ。

右の「さす」「しむ」は、或ものが他のものに動作を行はせる意味をあらはすもので、これを**使役の助動詞**といふ。

使役の助動詞は次のやうに活用する。

助動詞	未然	連用	終止	連體	已然	命令
す	セ	セ	ス	スル	スレ	セヨ

崇敬
る
らる
す
さす
しむ

四 崇敬の助動詞

- 一 父は謠曲を好まる。
- 二 校長は毎年上京せらる。
- 三 殿下式場に臨ませらる。
- 四 名刺を受けさせらる。
- 五 皇太子御位に即かしめ給ふ。

右の「らる」「せ」「しめ」は他の動作を敬ふ意をあらはすもので、これを**崇敬の助動詞**といふ。

◎崇敬の「せ」「しめ」は、通例崇敬の助動詞らる又は給ふの上

さす	サセ	サセ	サス	サスル	サスレ	サセヨ
しむ	シメ	シメ	シム	シムル	シムレ	シメヨ

時 完了
つぬたり
り

に結びつけて用ひる。

五 時の助動詞

(イ) 完了の助動詞

- 一 書を讀み
つぬたり。
- 二 書を讀めり。

右のつぬたりりは動作の完了した意をあらはすもので、これを完了の助動詞といふ。

完了の助動詞は次のやうに活用する。

助動詞	未然	連用	終止	連體	已然	命令
つ	テ	テ	ツ	ツル	ツレ	テヨ

過去

(ロ) 過去の助動詞

- 一 花散りき。
- 二 花散りけり。

右のきけりは動作の既にすぎ去つた意をあらはすもので、これを過去の助動詞といふ。

過去の助動詞は次のやうに活用する。

括弧内のものは現代文では殆ど用ひられない。

ぬ	ナ	ニ	ヌ	ヌル	ヌレ	ネ
たり	ラ	リ	リ	ル	レ	○
り	(ラ)	(リ)	リ	ル	(レ)	○

助動詞	未然	連用	終止	連體	已然	命令
き	○	○	キ	シ	シカ	○

未來

む(ん)

(ハ) 未來の助動詞

括弧内のものは現代文では殆ど用ひられない。

け	り	(ケラ)	(ケリ)	ケリ	ケル	ケレ	○
---	---	------	------	----	----	----	---

一 明日、出發せむ。(ん)

右のむ(ん)は動作の未來に起る意をあらはすもので、これを未來の助動詞といふ。

未來の助動詞は次のやうに活用する。

助動詞	未然	連用	終止	連體	已然	命令
む	○	○	ム	ム	メ	○

六 推量の助動詞

一 靜心なく花の散るらむ。

推量

らむ

けむ

べし

む

二 いつの頃なりけむ、確には覺えず。

三 明日は雨降るべし。

四 花咲かむ。

右のらむけむべしむは事物を推量する意をあらはすもので、これを推量の助動詞といふ。

推量の助動詞は次のやうに活用する。但しむは未來の助動詞の活用に同じである。

助動詞	未然	連用	終止	連體	已然
らむ	○	○	ラム	ラム	ラメ
けむ	○	○	ケム	ケム	ケメ
べし	ベク	ベク	ベシ	ベキ	ベケレ

打消 ず ざり じ まじ

七 打消の助動詞

- 一 花咲かず。
- 二 予は出席せざりき。
- 三 君はまだ遠くは行かじ。
- 四 夜はまだ明くまじ。

右のずざりじまじは打消の意味をあらはすもので、これを打消の助動詞といふ。

打消の助動詞は次のやうに活用する。

助動詞	未然	連用	終止	連體	已然	命令
ず	ズ	ズ	ズ	ヌ	ネ	○
ざり	ザラ	ザリ	ザリ	ザル	ザレ	ザレ

指定

なり

たり

八 指定の助動詞

- 一 かしこに見ゆるは我が家なり。
- 二 花の散りくるなり。
- 三 彼の性質は甚だよろしきなり。
- 四 君君たり、臣臣たり。

右のなりは事物動作有様を、たりは事物を指し定める意をあらはすもので、これを指定の助動詞といふ。指定の助動詞は次のやうに活用する。

じ	○	○	ジ	ジ	ジ	○
まじ	マジク	マジク	マジ	マジキ	マジケレ	○

咏嘆

なり

けり

九 咏嘆の助動詞

- 一 秋の野に人待つ蟲の聲すなり。
- 二 見渡せば花も紅葉もなかりけり。

右のなりけりは咏嘆の意をあらはすもので、これを咏嘆の助動詞といふ。

咏嘆の助動詞は次のやうに活用する。

助動詞	未然	連用	終止	連體	已然	命令
なり	ナラ	ナリ	ナリ	ナル	ナレ	ナレ
けり	○	○	ケリ	ケル	ケレ	ケレ
たり	タラ	タリ	タリ	タル	タレ	タレ

比況

ごとし

一〇 比況の助動詞

- 一 落花雪のごとし。
- 二 歲月流るゝ(が)ごとし。

右のごとしは事物を比較説明する意をあらはすもので、これを比況の助動詞といふ。

比況の助動詞は次のやうに活用する。

助動詞	未然	連用	終止	連體	已然
ごとし	ゴトク	ゴトク	ゴトシ	ゴトキ	○

一一 希望の助動詞

- 一 早く東京に行きたし。

右のたしは希望の意をあらはすもので、これを希望の助動詞と

希望
たし

いふ。
希望の助動詞は次のやうに活用する。

助動詞	未然	連用	終止	連體	已然
たし	タク	タク	タシ	タキ	タケレ

練習一五

練習

- 一 左の文中の助動詞を抜出してその種類をいへ。
- (イ) たゞかれて晝の蚊を吐く木魚哉
 - (ロ) 南の國には梅の花咲くらむ
 - (ハ) すぎたるは猶及ばざるが如し
 - (ニ) 主上はや院庄に入らせ給ふ
 - (ホ) 義を見てせざるは勇なきなり
 - (ヘ) かなはじとや思ひけむ太刀を捨てて逃げ失せたり

口語助動詞

受身

れる
られる

第六章 口語助動詞の種類及び活用

一 受身の助動詞

- 一 犬にかまれる。
- 二 先生にほめられる。

- (ト) 富士山は日本一の名山たり。
 - (チ) これは殿下の植ゑさせ給ひし松なり。
- 二 次の助動詞の活用を示せ。
- す。き。如し。む。らる。さす。

助動詞	未然	連用	終止	連體	假定	命令
れる	レ	レ	レル	レル	レレ	レヨ(ロ)
られる	ラレ	ラレ	ラレル	ラレル	ラレレ	ラレヨ(ロ)

可能
れる
られる
使役
せる
させる
崇敬

二 可能の助動詞

- 一 この本は私にも読まれる。
- 二 朝五時には起きられる。

◎可能の助動詞の活用は受身の助動詞と同じであるが、命令形がない。

三 使役の助動詞

- 一 生徒に字を書かせる。
- 二 大工に家を建てさせる。

助動詞	未然	連用	終止	連體	假定	命令
せる	セ	セ	セル	セル	セレ	セヨ(ロ)
させる	サセ	サセ	サセル	サセル	サセレ	サセヨ(ロ)

四 崇敬の助動詞

れる
られる

ます

時
過去
た

- 一 父上はよく字を書かれる。

- 二 先生は毎月上京せられる。

◎活用は受身の助動詞と同じであるが、命令形がない。
三 今日は雪が降ります。

このますは動作の主に対する尊敬ではなくて、話の相手に對する敬意を示すものである。

助動詞	未然	連用	終止	連體	假定	命令
ます	マセ	マシ	マスル	マスル	マスレ	マセ

五 時の助動詞

- (イ) 過去の助動詞

- 一 昨日雪が降つた。

未來

う

よう

推量

う

よう

らしい

(口)

助動詞	未然	連用	終止	連體	假定	命令
た	タラ	○	タ	タ	タラ	○

未來の助動詞

一 明日は雨が降らう。

二 次の日曜日に運動をしよう。

◎うよう共に活用せぬ。

六 推量の助動詞

一 雨が降らう。

二 月が出よう。

三 やがて櫻も咲くらしい。

助動詞	未然	連用	終止	連體	假定	命令
らしい	○	ラシク	ラシイ	ラシイ	○	○

まい

打消

ない

ぬ

まい

四

◎なほこの外に推量の否定まいがある。
彼は恐らく行くまい。

七 打消の助動詞

一 書を読まぬ。

二 風は吹くまい。

助動詞	未然	連用	終止	連體	假定	命令
ない	○	ナク	ナイ	ナイ	ナケレ	○

ぬ	○	○	ヌ(ン)	ヌ(ン)	ネ	○
---	---	---	------	------	---	---

まい	○	○	マイ	○	○	○
----	---	---	----	---	---	---

八 指定の助動詞

一 これは梅の花だ。

梅の花が散るのだらう。

二 これは梅です。

指定

だ(のだ)

です

比況

やうだ

希望

たい

九 比況の助動詞

一 人生は夢のやうだ。

助動詞	未然	連用	終止	連體	假定	命令
の	だ	だ	だ	だ	だ	だ
で	す	デセ	デシ	デス	デス	○
やうだ	ヤウダ	ヤウダ	ヤウダ	ヤウナ	ヤウナ	○

一〇 希望の助動詞

一 早く故郷に歸りたい。

助動詞	未然	連用	終止	連體	假定	命令
たい	○	タク	タイ	タイ	タケレ	○
やうだ	ヤウダ	ヤウダ	ヤウダ	ヤウナ	ヤウナ	○

練習一六

練習

一 左の文中の助動詞を指摘してその種類をいへ。

- (イ) 麥の收穫に使はれる馬はその麥を食ふことは出来ぬ。
- (ロ) 明日雨は降るだらう。しかし風は吹かないだらう。
- (ハ) 「君は何か読んで見たいと思ふ書物はありますか。」かう問はれてすぐに書物の名の言へないのは恥辱だ。
- (ニ) 今頃は定めしこちらの話をして居よう。
- (ホ) 今日は晝を習つた後で、一時間の散歩をした。
- (ヘ) 來客があるらしいから今は行くのをやめにしよう。
- (ト) お庭も拜見したければ、お話も伺ひたい。

助詞の用法

第七章 助詞の用法

助詞には種々あつて、その用法も亦複雑である。今その中で誤謬の生じ易いものについて其の用法を説明する。

一 ぞなむこそ

舜何人ぞ。

さる事は我は知らぬぞ。

右は文の終にぞを添へて強く指し示す意を表はしてゐる。

(タ上二、連體)

花ぞ落つる。

人と争はざるなむ賢き。
(形容詞、連體)

右は文の中程にぞやなむを添へたもので、かゝる場合には下は連體形で結ぶ定めである。

(カ四、已然)

花こそ咲け。

(形容詞、已然)

水こそ清けれ。

こそ

右のこそはぞなむよりも一層強く指し示す意を有する助詞で、下は已然形で結ぶ定めである。

二 やか

かゝることありやなしや。

かゝることあるかなきか。

夜は靜かに眠らるや。

夜は靜かに眠らるるか。

右は文の終にやかを添へて疑の意を表はしたものである。

(過去き、連體)

花や咲きし。

誰かある。
(ラ變、連體)

右は文の中程にやかを添へて疑の意を表はしたもので、下は連體形で結ぶ定めである。

誰かその悲慘に涙を流さざるべき。

か や

反語

係結

其の時悔ゆとも甲斐あらんや。
 かくてやは果つべき。
 いかで悲しみ嘆くべきかは。
 右のやかは反語の意をあらはす。而してかゝる場合に感動の助詞はを伴ひてやはかはとして表ははれることが多い。
 已に述べたやうに文の中程にぞなんこそやかがあると、下は連體形又は已然形で結ぶ定めである。これを係結の法則といふ。但し口語にはこの法は存しない。

係語

結語

ぞなんやか……………連體形
 こそ……………已然形

練習一七

練習

一 次の文の係結について説明せよ。

- (イ) 煙たなびくとまやこそわがなつかしき住家なれ。
- (ロ) 中江藤樹こそ眞の儒者なれ。
- (ハ) たゞ涙を催す種とぞなりし。
- (ニ) 東寺の塔を松の間に墨がきなせる筆の力ぞ巧なる。

三 ばとどもども

明日雨降らば延期せむ。
 明日天氣よくば旅行せむ。
 今日雨降れば行かず。
 水清ければ大魚棲まず。
 右の如くばが未然形に結びつく時は假定已然形に結びつく時は確定の意味をあらはす。

ば

とも

ど

ども

口語では左の例の如く已然形で假定確定兩様の意をあらはす。

明日雨が降れば延ばさう。

水が清ければ魚が棲まない。

鳥の鳴かぬ日はありとも親を思はぬ日はあらず。

たとひ兵寡くともよもや敗るることはあらず。

花咲けども 鶯未だ來鳴かず。

この品好ければ 買はず。

右の如くともが動詞の終止形、形容詞の未然形に結びつく時は假定、どどもが動詞形容詞の已然形に結びつく時は確定の意をあらはす。

口語 てもけれどもても。

と

並列のと

四と

鳥の鳴かない日はあつても……
品は好いけれども……
茶は飲んでも……

宗教と道德との關係。

京都と神戸と長崎とに行く。

事物を並列するとき、右の例の如くその一々の下にとを添へる定めであるけれども、誤解を生じない時は、最終の語句の下に之を省いても妨げない。(許容事項参照)

北條時宗、幼名を太郎といふ。

あの川を澱川と呼ぶ。

右のとは動作の標準を示す。

動作の標準を示す

五 だにすらさへ

鳥にだにしかず。

草木すら情あり。

雨降り風さへ吹く。

右の内だにすらに輕きをあげて重きを言外に思はせ、さへはあ
るが上に更に添ひ加はる意の助詞である。

口語ではだにもすらもなく、さへが一般に用ひられる。

鳥にさへ及ばない。 行方さへも分らぬ。

六 なな……そ

決して怠るな。

危き場所に居るな。

右の如くなを動詞の終止形に添へると、その動作をすなと禁止
する意を表す。但し、ラ變の動詞に限つて、その連體形に添はる。

な……そ

かくなのたまひそ。

深くな咎めそ。

吹く風をなこその關と思へども道もせに散る山櫻かな。
近く寄りて過なせそ。

な……そはなと同じく禁止の意をあらはす。而してこの場合
にそは動詞の連用形を受ける。但し、カ・サ變格の動詞に限り、そ
の未然形を受ける。

七 ばやなむ

繪を巧に畫かばや。

我が子、學者にならなむ。

右のばやなむは願望の意をあらはし、共に未然形につく。

八 にへ

學校に行く。

大阪に住む。

ばや
なむ

が に を

前へ進む。

彼方へ向ふ。

右のには場所を示し、へは方向を示す。

口語ではへにも同じやうに用ひられる。

学校へ行く。 彼方へ向ふ。

九 がにを

大いに努力せしが遂に效なかりき。

日暮れたるに宿るべき家もなし。

いそがずばぬれざらましを旅人のあとよりはるる野路

の村雨。

右のがにをは語句を接續する助詞であつて、活用する語の連體形に結びつく。

口語ではがは文語と同じであつて、にをはのにに相當する。

て て

練習一八

一〇 てで

日くれて道遠し。

言はでやみぬ。

(ではずての變化したものである)

右のてでは語句を接續する助詞てでは連用形に、では未然形に結びつく。

練習

一 左の文中の傍線を引ける助詞を説明せよ。

(イ) 勉強さへすればどんなことでも出来る。

(ロ) わるいことは決してするな。

(ハ) もし不都合なる點あらば指摘せらるべし。

(ニ) 良からぬ小説などな読み給ひそ。

(ホ) 月を見れども、楽しからず、鳥を聞けども、嬉しからず。

接頭語

- (へ) 波風の静かなる日も舟人はかぢに心を許さざらなむ。
- 二 左の文に誤があれば正し、且つその理由を述べよ。
- (イ) 萬一失敗すれども決して落膽すべからず。
- (ロ) もし御差支も候へば御一報下されたく候。
- (ハ) 車へ乗りて行かむ。
- (ニ) 雪だに生憎に降り出でて寒氣いよく加はりぬ。
- (ホ) 志を遂げんと欲すれば須く努力すべし。

第八章 接頭語・接尾語

一 接頭語

單獨では用ひられず、ある他の語の上について、其の語と熟語をなすものを接頭語といふ。

接尾語

い	……	います	いや	……	いや高し
う	ひ	……初陣	う	ら	……うら悲し
お	……	お内	お	ん	……おん前
か	……	か細し	か	……	か弱し
け	……	け高し	さ	……	さ霧
す	……	す肌	た	……	たなびく
ほ	の	……ほの見ゆ	ま	……	ま木
み	……	み雪	も	……	もの寂し
を	……	を川			

接頭語には意味を添へるものと、添へないものがある。而して接頭語が添うて出来た熟語はもとの語と品詞を同じうする。

二 接尾語

單獨では用ひられず、ある他の語の下について、其の語と熟語をなすものを接尾語といふ。

私ども

僕ら

あなたがた

たち

(以上複数をあらはすもの)

次郎どの

さま

山本君

(以上敬意をあらはすもの)

黒さ

厚み

(以上形容詞の語幹について名詞をつくるもの)

春めく

黄ばむ

神さぶ

がる

(以上名詞・形容詞について動詞をつくるもの)

男らし

露けし

(以上名詞について形容詞をつくるもの)

夜すがら

少しづつ

花見がてら

(以上名詞・形容詞等について副詞をつくるもの)

以上列挙した例のやうに接尾語はいづれも或意味を添へるものである。而して接尾語が添うて出来た熟語は、接尾語の性質によつて品詞を異にするものである。

練習一九

練習

一 左の文中から接頭語と接尾語とを摘出せよ。

(イ) さ夜ふけてほの暗き御あかしの影ものさびし

(ロ) 春來れば雪消の澤に袖垂れてまだうら若き若菜をぞ摘む

(ハ) 秋らしくなりていと露けし。

(ニ) 同じ自然の御母の御手に育ちし姉と妹み空の花を星といひ、わが世の星を

花といふ。

(ホ) 色々御世話になりました。この御恩は決して忘れませぬ。

訂三新制中學文典

初學年用 終

附錄 文法上許容ニ關スル事項

一 「居リ」「恨ム」「死ヌ」ヲ四段活用ノ動詞トシテ用キルモ妨ナシ。

二 「シク・シ・シキ」活用ノ終止言ヲ「アシシ」「イサマシシ」ナド用キル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。

三 過去ノ助動詞ノ「キ」ノ連體言ノ「シ」ヲ終止言ニ用キルモ妨ナシ。

例 火災ハ二時間ノ長キニ互リテ鎮火セザリシ。

金融ノ靜謐ナリシ割合ニハ金利ノ引弛ヲ見ザリシ。

四 「コトナリ」(異)ヲ「コトナレリ」「コトナリテ」「コトナリタリ」ト用キルモ妨ナシ。

五 「、セサス」トイフベキ場合ニ(七)ヲ略スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。

例 手習サス。

周旋サス。

賣買サス。

六 「、セラル」トイフベキ場合ニ(、サル)ト用キル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨

六 ナシ。

例 罪サル。

評サル。

解釋サル。

七 「得シム」トイフベキ場合ニ「得セシム」ト用キルモ妨ナシ。

例 最優等者ニノミ褒賞ヲ得セシム。

上下貴賤ノ別ナク各其ノ地位ニ安ンズルコトヲ得セシムベシ。

八 佐行四段活用ノ動詞ヲ助動詞ノ「シシカ」ニ連ネテ「暮シシ時」「過シシカバ」ナドイ

フベキ場合ヲ「暮セシ時」「過セシカバ」ナドトスルモ妨ナシ。

例 唯一遍ノ通告ヲ爲セシニ止マレリ。

攻撃開始ヨリ陥落マデ僅ニ五箇月ヲ費セシノミ。

九 てにをはノ「ハ」動詞助動詞ノ連體言ヲ受ケテ名詞ニ連續スルモ妨ナシ。

例 花ヲ見ルノ記。

學齡兒童ヲ就學セシムルノ義務ヲ負フ。

市町村會ノ議決ニ依ルノ限リニアラズ。

一〇 疑ノてにをはノ「ヤ」ハ動詞形容詞助動詞ノ連體言ニ連續スルモ妨ナシ。

例 有ルヤ。

面白キヤ。

父ニ似タルヤ母ニ似タルヤ。

一一 てにをはノ「トモ」ノ動詞使役ノ助動詞及ビ受身ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル習

慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。

例 數百年ヲ經ルトモ。

如何ニ批評セララルトモ。

強ヒテ之ヲ遵奉セシムルトモ。

一二 てにをはノ「ト」ノ動詞使役ノ助動詞受身ノ助動詞及ビ時ノ助動詞ノ連體言ニ連

續スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。

例 月出ヅルト見エテ。

嘲弄セララルト思ヒテ。

終日業務ヲ取扱ハシムルトイフ。
萬人皆其ノ徳ヲ稱ヘケルトゾ。

一三 語句ヲ列擧スル場合ニ用キルてにをハノ「ト」ハ誤解ヲ生ゼザルトキニ限り最終ノ語句ノ下ニ之ヲ省クモ妨ナシ。

例 月ト花。

宗教ト道德ノ關係。

京都ト神戸ト長崎ヘ行ク。

最終ノ「ト」ヲ省クトキハ誤解ヲ生ズベキ例。

史記ト漢書トノ列傳ヲ讀ムベシ。

史記ト漢書ノ列傳トヲ讀ムベシ。

一四 上ニ疑ノ語アルトキニ下ニ疑ノてにをハノ「ヤ」ヲ置クモ妨ナシ。

例 誰ニヤ問ハン。

幾何ナルヤ。

如何ナル故ニヤ。

如何ニスベキヤ。

一五 てにをハノ「モ」ハ誤解ヲ生ゼザル限リニ於テ「トモ」或ハ「ドモ」ノ如ク用キルモ妨ナシ。

例 何等ノ事由アルモ(アリトモ)議場ニ入ルコトヲ許サズ。

期限ハ今日ニ迫リタルモ(タレドモ)準備ハ未ダ成ラズ。

經過ハ頗ル良好ナリシモ(シカドモ)昨日ヨリ聊カ疲勞ノ狀アリ。

誤解ヲ生ズベキ例。

請願書ハ會議ニ附スルモ(ストモ)之ヲ朗讀セズ。

給金ハ低キモ(ケレドモ)應募者ハ多カルベシ。

一六 「トイフ」トイフ語ノ代リニ「ナル」ヲ用キル習慣アル場合ハ之ニ從フモ妨ナシ。

例 イハユル哺乳獸ナルモノ。

顔回ナルモノアリ。

理由書

國語文法トシテ今日ノ教育社會ニ承諾セラルルモノハ徳川時代國學者ノ研究ニ基キ、專ラ、中古語ノ法則ニ準據シタルモノナリ。然レドモ、之ニノミ依リテ、今日ノ普通文ヲ律センハ、言語變遷ノ理法ヲ輕視スルノ嫌アルノミナラズ、コレマデ、破格、又ハ、誤謬トシテ斥ケラレタルモノト、雖モ中古語中ニ其ノ用例ヲ認メ得ベキモノ尠シトセズ。故ニ文部省ニ於テハ、從來、破格、又ハ、誤謬ト稱セラレタルモノノ中、慣用最モ弘キモノ數件ヲ舉ゲ、之ヲ許容シテ、在來ノ文法ト並行セシメント期シ、其ノ許容如何ヲ國語調査委員會ニ諮問セシニ同會ハ審議ノ末許容ヲ可トスルニ決セリ。依テ、自今文部省ニ於テハ教科書檢定又ハ編纂ノ場合ニ之ヲ應用セントス。

(明治三十八年十二月二日 文部省告示第五百五十八號)

[表二第]

表用活詞容形語口		表用活詞容形語文			
涼 清 シ	語 幹	種 類	活 用 の	語 幹	
				未 然	活 用
○	未 然	涼	清	未 然	活 用
ク	連 用	シク	ク	連 用	形
イ	終 止	シク	ク	終 止	形
イ	連 體	シ	シ	連 體	形
ケ レ	假 定	シキ	キ	已 然	形
		シケレ	ケレ	已 然	形

サ行變格	(爲)	シセ	シ	スル	スル	スレ	セヨ
------	-----	----	---	----	----	----	----

[表 一 第]

表用活詞動語口

サ行 變格	カ行 變格	下 一 段		上 一 段		四 段			種 類	活 用 の
		(蹴)	兼	(着)	起	有	死	書		
(爲)	(來)								語 幹	
シセ	コ	ケ	ネ	キ	キ	ラ	ナ	カ	未 然	活 用 形
シ	キ	ケ	ネ	キ	キ	リ	ニ	キ	連 用	
スル	クル	ケル	ネル	キル	キル	ル	ヌ	ク	終 止	
スル	クル	ケル	ネル	キル	キル	ル	ヌ	ク	連 體	
スレ	クレ	ケレ	ネレ	キレ	キレ	レ	ネ	ケ	假 定	
シセ ロヨ	コイ	ケ ヨ	ネ ヨ	キ ヨ	キ ヨ	レ	ネ	ケ	命 令	

表用活詞動語文

ラ行 變格	ナ行 變格	サ行 變格	カ行 變格	下 一 段	下 二 段	上 一 段	上 二 段	四 段	種 類	活 用 の
有	死	(爲)	(來)	(蹴)	兼	(着)	起	書	語 幹	
ラ	ナ	セ	コ	ケ	ネ	キ	キ	カ	未 然	活 用 形
リ	ニ	シ	キ	ケ	ネ	キ	キ	キ	連 用	
リ	ヌ	ス	ク	ケル	ヌ	キル	ク	ク	終 止	
ル	ヌル	スル	クル	ケル	ヌル	キル	クル	ク	連 體	
レ	ヌレ	スレ	クレ	ケレ	ヌレ	キレ	クレ	ケ	已 然	
レ	ネ	セヨ	コヨ	ケヨ	ネヨ	キヨ	キヨ	ケ	命 令	

[表二第]

表用活詞容形語口		表用活詞容形語文	
涼	清	種	活
シ	幹	類	用の
○	未然	涼	清
ク	連用	シク	ク
イ	終止	シク	ク
イ	連體	シ	シ
ケレ	假定	シキ	ケレ
		シケレ	ケレ

[表一第]

表用活詞動語口										表用活詞動語文											
サ行	カ行	下	上	四	種	活	ラ行	ナ行	サ行	カ行	下	下	上	上	四	種	活				
變格	變格	一	一	段	類	用の	變格	變格	行	行	一	二	一	二	段	類	用の				
(爲)	(來)	(蹴)	兼	(着)	起	有	死	書	語	幹	有	死	(爲)	(來)	(蹴)	兼	(着)	起	書	語	幹
シセ	コ	ケ	ネ	キ	キ	ラ	ナ	カ	未	然	ラ	ナ	セ	コ	ケ	ネ	キ	キ	カ	未	然
シ	キ	ケ	ネ	キ	キ	リ	ニ	キ	連	用	リ	ニ	シ	キ	ケ	ネ	キ	キ	キ	連	用
スル	クル	ケル	ネル	キル	キル	ル	ヌ	ク	終	止	リ	ヌ	ス	ク	ケル	ヌ	キル	ク	ク	終	止
スル	クル	ケル	ネル	キル	キル	ル	ヌ	ク	連	體	ル	ヌル	スル	クル	ケル	ヌル	キル	クル	ク	連	體
スレ	クレ	ケレ	ネレ	キレ	キレ	レ	ネ	ケ	假	定	レ	ヌレ	スレ	クレ	ケレ	ヌレ	キレ	クレ	ケ	已	然
シセ	コイ	ケヨ	ネヨ	キヨ	キヨ	レ	ネ	ケ	命	令	レ	ネ	セヨ	コヨ	ケヨ	ネヨ	キヨ	キヨ	ケ	命	令

[表 三 第]

表 用 活 詞 動 助 語 文

咏 嘆	指 定		打 消				推 量				時				崇使 敬役			可 能				崇受 敬身		の 種 類	助 動 詞	語	
	け り	な り	た り	な り	ま じ	じ	ざ り	ず	ら し	べ し	け む	ら む	む	き	け り	た り	ぬ	つ	し む	さ す	す	べ か り	べ し				ら る
○		ら	く	○	ら	ず	○	く	○			○	○	ら	な	て	め	せ			ら	く	れ		れ	未然	活 用 形
○		り	く	○	り	ず	く		○			○	○	り	に	て	め	せ			り	く	れ		れ	連用	
り		り		じ	り	ず		し		む		む	き	り	ぬ	つ	む	す			(り)	し	る		る	終止	
る		る	き	じ	る	ぬ	き		む		む	む	し	る	ぬ	つ	む	する			(る)	き	る		る	連體	
れ		れ	けれ	じ	れ	ね	○	けれ		め		め	しか	れ	ぬ	つ	む	すれ			(れ)	けれ	る		れ	已然	
○		れ	○	○	れ	○	○		○		○	○		○	ね	て	め	せ			○	○	○		れ	命令	

文部省檢定濟

昭和拾年貳月拾壹日 中學國語文用科

昭和十年八月二十五日 印刷
昭和十年三月三十一日 發行
昭和十年十二月十二日 再版發行

訂三新制中學文典初學年用

定價金四拾三錢



著者 吉澤義則
京都市左京區修學院西沮澤町四

印刷者兼發行者 鈴木政雄
東京市神田區神保町一丁目二十五番地

發行者 鈴木常松
大阪市東區博勞町五丁目五十六番地

發行所

東京市神田區神保町一丁目二十五番地 振替口座(東京二六四四番) 東京修文館
大阪市東區博勞町五丁目五十六番地 振替口座(大阪四七一番) 大阪修文館

文淵閣書目

中華民國二十一年五月一日

圖書部
研究部
十卷
八卷
二卷
五卷
四卷
三卷
二卷
一卷



發行部

發行部
發行部
發行部
發行部
發行部
發行部
發行部
發行部
發行部
發行部

大題
東京
文淵

發行部
發行部
發行部
發行部
發行部
發行部
發行部
發行部
發行部
發行部

圖書部
研究部
十卷
八卷
二卷
五卷
四卷
三卷
二卷
一卷



修中三
岩崎
武

文庫
35
358

広島大学図書
2000041358
